
時計塔の恋する悪魔

鈴木 鶯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計塔の恋する悪魔

【Nコード】

N0867W

【作者名】

鈴木 鶉

【あらすじ】

『その時計塔には、秘密がある。』天才時計職人で時計塔番人主任ハンスの娘マナは国立時計専門学校の1年生。男子ばかりの学校の中でもいい友人に囲まれ、父のような時計塔の番人になる日を夢見て勉強中。しかしある日、国立図書館で勉強していたマナはたまたま大統領の息子ユーリとその付き人青年イアンのお話を立ち聞きしてしまい、時計塔にトラブルが起き大好きな父の身に何かあったらしいことを知る。謎の多い時計塔に忍び込むマナだったが・・・途中まで他サイトより転載。ストーリー展開は驚異の浅さ、更新は

驚異の遅さ。駄文乙。

プロローグ（前書き）

駄文でスミマセン。ストック分まであげたらあとは放置するかもしれません。

ブローグ

時間とは何か。

私に誰も問わなければ、私は『時間とは何か』を知っている。しかし、『時間とは何か』を問われ、説明しようと欲すると

私は、『時間とは何か』を知らない。

より

アウグスティヌス『告白』

老人は、疲れていた。

狭く、狭い時計塔の中、自分に充てられた小さな一室で束の間の休息をとっていた彼は、外部から久しぶりに届いた小さな手紙に、その厳しい顔をほころばせた。

何年もの間、毎月決まった日に妻から届いていた手紙。ここ数年、妻は体調を崩し、決まった日に届くというわけにはいかなかったけれど、それでも老人はその手紙を楽しむにしていた。

若い頃は時計職人の仕事に全精力を注ぎ、あまり家庭を顧みることがなかった老人だったが、こうして妻からの手紙を楽しむにするようになったということは……『引退』の二文字が老人の頭をよぎる。

老人の年齢的に、ギルドによる番人への選出は今年が最後でもなんら不思議はなかった。

もし次回選ばれたとしても、老人は自ら辞退するつもりでいた。

もう、この時計塔で自分ができることはない。

自分の任期の間、大きな問題は何一つ起こらなかったし、何より自分の知りたいことは全て知ることができた。

後任についても、あの若い主任が他の番人たちをうまく導いてくれるだろう。

彼がきてから老人の仕事はずいぶん楽になった気がする。天才、というのはああいう男のことを言うのだろうと思う。

老人は、息子とやっていいほど歳の離れた若い主任のことを頼もしく思っていた。その才に嫉妬するには、老人は歳をとりすぎていたのだ。

番人の仕事に、思い残すことはない。

ここを退いた後、番人を長年務めたものには支給されるはずの、そこそこの額の年金を使って妻と二人で静かに暮らそう。

少しは贅沢だつてさせてやれるかもしれない。そうだ、妻の病気に良いという、気温の安定した空気のない南部の田舎に引っ越してもいい。

そうして二人、今までの時を取り戻すように、どちらかの最期の時

まで寄り添って。

二人きり。

老人には、かつて妻が唯一欲しがった子供を与えてやる余裕もなかったのだ。

時計職人としてこの番人の地位に昇り詰めることだけを考えていたから。

子供のことだけではない。老人は常に職人として、自分のことだけを考え生きてきた。

それでも、この50年の間、妻は変わらず老人に愛のある温かい言葉を送り続けてくれた。

自分には、もったいなほどの妻。私ではなく誰か他の者に嫁いでいれば、今頃たくさんの孫たちに囲まれて、幸せな気持ちで人生の終点を迎える準備をしていただろうに。

・・・まったく、酷いことをしたものだ。時間は『二度と、取り返せない』。妻の未来を奪ったのは、確かに自分だ。

そこまで考えて、老人はちらりと頭をよぎるその恐ろしい技法を、ぶんぶんとかぶりを振って追いやった。

番人を引退したら、忘れなくてはならないその数々の秘密。

いいのだ、私はこれから妻との静かな余生を楽しめばいいだけなのだから。時計塔の番人として過ごした人生の大半に後悔はないのだ

から。

ここで得た知識の中で、人間が使っている技術、使ってはいけない技術の分別も、老人には十分すぎるほどあった。

番人の誇りにかけて、そのようなことは考えるだけでも恥だというのに、私も歳をとり弱ったものだ。

老人はそれらを頭から消し去るために、これから妻と過ごすつもりで満たされた時間のことを考え、ふと笑った。

それから、いつも妻が送ってくれる美しい花柄の封筒にさくさくとペーパーナイフを入れる。

今日は何が書いてあるのだろう。妻の体の具合はどうだろうか。・・・
たまには、返事くらい書いてやろうか。

・
・
・
・
・
・

拝啓、愛する旦那様へ

この手紙をあなたが受け取るということは、わたくしは、もうこの世にはいないということです。

ああ、どうか、驚かないで、お怒りにならないで聞いて下さいまし。
わたくしはもう長いこと病を患っておりますね。あなたには、心臓が少し弱くなったのだと申しておりましたが、実は、お医者様には数年前からそう長くはないことを知らされておりました。けれど、あなたにはご心配をおかけしたくなかった。あなたの大切なお仕事

のことを考えると、わたくしのことで少しでも煩わせなくなかったのです。

ですから、わたくしが死んだ後も、しばらくはあなたに連絡をせず、信頼のできるご近所の方々にひっそりと弔って頂いた後、この手紙をあなたの元へと届けてくださるようお願いしてあります。今頃、わたくしの体は教会の墓地で静かに眠らせて頂いているのです。もうあなたにご心配頂くようなことは何一つございません。安心して、お仕事を最後までやり遂げて下さいませ。あなたにしか、できないことを。

そうして、いつかお暇ができましたら、私の眠る場所に一度でいいので来て頂けたら、と。妻として、あなたのお帰りまで待つていらねなかつたわたくしをお許しください。それから、愛するあなたに嘘をついたまま逝くわたくしをお許しください。

さようなら。永遠にあなたを愛しています。

はらり、とその皺だらけの手から便箋が床に舞う。床をすべる紙に掬われた埃が、白く薄く積もる。

時計職人の彼にとって、金属部品ばかりを扱い節くれだつたその指は、何より勲章のはずだった。

正確な時間を刻む時計がすべて。自分の技術の向上がすべて。そう思い、何十年も必死に努力をし、ようやく手に入れた番人の地位。

人外の知恵に触れることのできるこの塔での仕事は、それは素晴らしいものだっただけだ。

だが。今、この胸にあいた喪失感はどうだ。

自分のしてきたことは一体何だったのか。 自分の人生とは一体何だったのか。

君に、会いたい。君の笑顔をもう一度見たい。
許してくれ。許してくれ。

「私は、まだ君に・・・何もしてやれてないんだ・・・」

これから。静かな湖のほとりに君のために小さな家を建て、庭にはたくさんの花が溢れ、子供がいらない代わりに何か小さな動物でも飼いたい。

そうして、君がいつか淹れてくれたあの琥珀色のお茶を、今度は私が君に淹れて。陽だまりの中、年老いても美しいままであろう君の笑顔を見つめ・・・

未来は崩れた。
過去は去った。

老人は、肩を震わせながら両手で顔を覆い、床に屈した。

その塔は誰が作ったのかわからない。

国立図書館に存在するこの国最古の書物によると、世界ができたときにはもうすでにそこに『在った』という。

そんなわけではない、と少女は思う。

だって、誰かが石を切り出し、レンガを焼き、森の木を切って、それから時計のぜんまいを巻かなければ。

でなければ、世界が始まってもないというのに、いったい誰がそんなもの創ったというの？誰も暮らしていないこの世界で、なんのために？

ほんとのところ、きっとこの国が、『この国』になった数百年・・・その間にも、いくつもの戦争が起こり、天災が訪れ、国の名前も支配する人間も変わり、そうこうしている間に人々の記憶が曖昧になり、そのような胡散臭い伝説へとなっていっただけなんだろう。

そもそも、時計塔を作ったのが人間である証拠に、今でも時計塔専門の職人たちが交代で塔の中にこもり、メンテナンスをおこなっている。

人の手がなければ、時計は止まってしまっし、国中に響くようなあの鐘の音で人々が時間を知ることできない。

きっと、あの塔を作ったのは、父のようにものすごく腕のいい時計

職人と、すばらしい頭脳をもつ建築家だったに違いない。

少女は、そう思うと少し誇らしい気持ちで、窓からはるか丘の上に聳えるその塔を眺めた。

少女の名前は、マナ。国立の時計職人の専門学校に通う16歳。

マナの父は、今年、時計塔の番人をしている。時計や精密機械の製造を主な産業とするこの国の中でも、父はトップクラスの天才時計職人で、国中の時計職人の中でもエリート中のエリートだけが選ばれる時計塔の番人の主任だ。

マナが生まれてまもなく母は死んでしまったけれど、マナと、兄のヨシユアは、父親の時計工房で遊びながら仲良く育ってきた。

遊び道具はもちろん工房のあちこちに散らばっていた時計の部品。

物心つくころには、壊れた時計を分解して正しく修理して組み立てることができるようになっていた。

マナの通っている時計学校を主席で卒業したヨシユアは、今は隣の国の時計塔の建設に携わっている。

もちろん、マナの夢も時計職人になること。そうしていつか、父のようにあの時計塔の番人になれば。

いままで、女性が番人に選ばれたことは、あの時計塔がもつ長い歴史の中で一度もないのだけれど・・・。

あの時計塔はすごく特別なのだ。

どう特別かって聞かれても、マナにもいまいち答えられない。

もちろん、そのはじまりについての伝説は怪しいとは思っけど、それだけじゃない。

あの塔に関しては、秘密がたくさんあるらしい。

一般人にはもちろん、時計についてひとより少し詳しいマナにもわからないこと、それは、番人選ばれた人たちだけが知ることのできるものだと、マナの父はいつか言った。

家族にも話せない。それが、知りたい。

あの大きな時計塔の仕組みを自分の目で確かめてみたい。

一般公開されている塔の入り口付近の展示室じゃなくて、貴族や政治家、大統領だって踏み込むことのできない塔の上層部。

そこに入れるのは、時計職人のギルドが年に5人だけ選ぶエリートだけ。

父は、今回が3回目、しかも主任。番人の任期についているうちは、病気などの特殊な事情をのぞいて、一日たりともそこから出ることができない。

この国の特別な、そして華々しい行事の一つである番人の交代式ま

で、あと数ヶ月。

父には会えない。兄も、外国にいる。しかしマナだって、たったひとり、全寮制のこの時計学校で頑張っているのだ。

『家族、みんなそれぞれの道をいく。だけど、心はいつもひとつ。家族を愛し、信じ、そして、人々が笑顔になるような時計を作ろう。』

それは、正確な技術だけを重視しがちな時計職人の世界にありながらも、父がマナとヨシユアにいつも説いてきたことだった。

父をこの世で一番尊敬している。父の言うことに間違いなんてない。

なかば盲目的にそう思っているマナは、その言葉をそのままそっくり信じている。だけど、他の職人や、時計学校の生徒たちはそうでもないようにで……。

「おい！マナ！まだかよ？早くしろよ！まだ寝てんじゃねえだろうな！」

「マーナーちゃん、今日の午前は『歩く時計』の授業だよー遅刻なんてしたら、また宿題の山だよー」

そんな声とともに、ドンドン、とマナの部屋のドアがせわしく叩かれた。

窓から時計塔をぼんやりと眺めていたマナは、はっとして自分の首からさげられた金色の懐中時計に目をやる。

父が作ってくれた、この世にたった一つのマナの時計は、いつだって時計塔のそれと同じ正確な時刻を示しており。

「うええええ！？もうこんな時間！！！」

そこに示された、授業開始までの時間は、あと15分。

時計学校の敷地内にあるこの寮から、1年生の教室までは早足でちようど15分。

走ったところで、10分近くかかる。

「こんな時間、じゃねえよ！早く出て来い！同班はみんな連帯責任なんだからなっ！」

「わ、わかってるよ！」

マナは外で待つ二人のクラスメイトにそう答えると、慌てて勉強道具を鞆に突っ込み、そのまま部屋を出ようと・・・少し思い止まって、鏡の前で、サツと首もとのリボンを結びなおした。

膝丈のプリーツスカートと同じ生地で作られた赤いチェックのリボンは、一年生には一人しかいない、学校全体でも数人しかいない、女子用の制服。

男子は皆二人部屋なのに、マナは一人で使う寮の部屋。

「おい！早くしろっ！」

「マナちゃん、マジやばい。『歩く時計』が校舎に入ったよ!」

外の二人が、しびれを切らし始める。

「お待たせっ! 行こう!」

マナは部屋のドアをガチャリと開けると、外に飛び出した。

「マジでドン臭いなおまえは！ほんとにあのヨシユアさんの妹かよ！?・・・ほら、そのカバンよこせ！」

乱暴な口調でそう言いながらも、バタバタと走るマナの鞆を奪うようにして持ってくれたのは、シリルという少し小柄な少年だ。

少し硬質な薄い茶色の短髪をツンツンと立たせ、紺色の制服も内側のシャツを着崩している、街中に溢れていそうな普通の少年である。

ちなみに、下町のパン屋の三男坊。

世襲がほとんどの時計職人の世界において、シリルのようにパン屋の息子が時計学校に通うのは珍しいことだった。

幼い頃から時計職人に憧れ、反対する親を根負けさせてとうとう時計学校に入学したシリルの憧れの人物は、マナの兄のヨシユア。その憧れようは尋常ではなく、むしろ崇拜の域にまで達している。

シリルは、いつもこうしてマナとヨシユアを比べては、ああ、ヨシユアさんが俺の兄ちゃんだったらなあ・・・と呟くのがお決まりなのだ。

少し（いや、かなり？）口が悪く、マナにわざと意地悪を言ったりはするけれど、もちろん敬愛するヨシユアの妹マナを嫌うわけがない。それに下町の人間の良さで、面倒見はいい少年だ。

「朝が苦手なんだったら、今日から僕とシリルの部屋で一緒に寝よ

つか？僕のベッドならいつ使ってくれてもかまわないよ？」

遅刻しそうだというのに、くすくすと笑いながらそんなことをのたまっているのは、もう一人のクラスメイト、フランチ。

ひよろひよろとした長身の優男で、見た目も軟派、中身も軟派。マナにすら無駄に流し目、栗色の長い髪からは、なんだかいつも甘い匂いを漂わせている。

パン屋の息子のシリルとは対照的に、こちらは宝飾品としての時計を販売している国内でも有数の宝飾店の跡取り……つまり、かなりのお坊ちゃまだ。

時計というものは、常に正確な時を刻む性能や品質の高さだけが求められるわけではない。

貴石を用いたり繊細なデザインの金細工を施した豪華な宝飾時計は、この国の重要な産業品のひとつである。

国内外の富裕層に向けた販売はもちろん、外交の手段に隣国の王室に贈り物として届けられることもある。

とりわけ、フランチの家、『ヘンレイン商会』の宝飾時計は歴史も古く、現在は共和政を敷くこの国がまだ王政だった頃から王室御用達の工房として名を馳せてきた。

フランチの父は、現在、時計塔の番人を選出するギルドのメンバーでもある。

まあしかし、どれだけお金持ちだったとしても国立時計学校は全寮

制。

フランスも例外なく、マナやシリル同様につつましい学生寮生活を送っている。

「・・・うん、明日からは目覚ましのベルをもうひとつ多めにセツトするから大丈夫だよ。」

「そう？遠慮しないでいいんだよ？僕も、マナちゃんと一緒に朝まで眠れば、すごく幸せな夢が見れる気がする。」

「・・・・・・・・・・。一人の方がぐっすり寝れるよ。」

朝の青空の下、鳶の絡まる鉄製の校門を走ってぐり抜けながら、マナはフランスに呆れたようにそう答えた。

時計学校に入学したての頃は、フランスの口から溢れる口説き文句にマナもいちいち真っ赤になったりもしたものだ、半年もたった今では右から左へと受け流すのが日常となっている。

この軽薄で女好きなお坊ちゃん、女性を見たら口説くのが礼儀だと思っているのだから。

まあ、その『女の子大好き』なビョーキ以外はたいして害もないし、男子にも愛想がよく人懐っこいので、フランスは友人が多い。

マナも、妙に口説いてくるところさえのぞけば、フランスのことは好ましい友人だと考えていた。

シリルにしても同様で、口の悪いところさえのぞけばなかなか頼り

になる友人だ。

マナと、シリル、フランスの3人は、同じクラスの同じ班ということで、とりわけ一緒にいることが多い。

当初、ほとんどの生徒が男子ばかりの時計学校に入学するのは、マナとしては少し不安もあったのだが、こうして親しい友人もでき、時計職人の卵としてはまず順調なスタートを切ることができていた。

「おいっ！そこの二人！もっと早く走れっつーの！遅刻だって言うてるだろ！」

3メートルくらい先を走っていたシリルがこちらを振り返って叫ぶ。

「うん！わかってる！」

「はいはいー」

・・僕が抱っこして走ろうか？などとにこやかにほざくフランスを無視しつつ、マナは教室へと向かって急いだ。

そんな3人の後方、丘の上にそびえる時計塔は、朝陽を浴びながらいつもと変わらず正確な時を指し示していた。

・・・・まだ、このときは。

2（後書き）

フランチは公爵の方にも出てくるヘンレイン商会の跡取りですね。はい、どうでもいい設定ですね。すみません。

ゴオオオン・・・ゴオオオン・・・

この国に生きる人間なら、生まれたときから耳に馴染んでいる響き。

時計塔の鐘が時を告げる音が、街中に鳴り渡り始める。

夜間以外は、一時間に一度、時の数だけ鐘が鳴らされる。何百年も続いてきたこの営みは、この国の人間にとって、朝、太陽が空へ昇るのとほとんど同じようなことだ。

鐘の音を聞いて、教会の修道士たちは祈りを捧げる。また、商店街の人間は店を開け、郊外の農夫たちは休息の時を知る。時計などという高価なものを手に入られない貧しい人間にも、この鐘の音は平等に時を告げる。

貧富、貴賤関係なく、時間は、すべての人間が平等に受けるものであることをしらしめすかの如く。

廊下をドタドタと走ってきた3人は、その鐘の音が終わるか終わらないかギリギリのところで教室に滑り込んだ。

「うっはぁー、セーフー!!」

「間に合ったねー」

ドカッと席に着くシリルとフランスの二人を横目に、マナはぜいぜ

いと肩で息をしながら机にしがみつくようにして座り込んだ。

16歳ともなると、体力の男女差は大きい。すうはあ、すうはあ、と息を整え、なんとか教壇の方に顔を向けたマナの目に映ったのは。

「おはよう、君たち。11秒の遅刻ですね。」

御年70歳とは思えぬ凜とした声。上品に梳かしつけられた白髪に、きつちりと着込まれた年季の入ったジャケット姿。痩せて皺だらけの顔、その中でも、薄いブルーの瞳だけが今でも強い光を放つ・・・

「げえ・・・」

「エマヌエル先生・・・」

『歩く時計』こと、時計学校校長、エマヌエル先生だ。

「たった11秒だぜ・・・？」

「えー。間に合ったと思ったのにね。」

ぶつくさと文句をたれるシリルとフランツ。それを見たエマヌエル先生のこめかみに、ぴしりと血管が浮く。

「・・・ちょ、ちょっと、二人とも・・・」

マナは慌てて二人に向かってしーっと人差し指を唇に当てる。しかし。時すでに遅し。

「・・・１１秒でも、遅刻は遅刻。時計職人を目指すものが口にす
る言葉とは、到底思えません。」

しかも、君たち３人は先週の私の授業にも遅刻しましたね？時間を
守れない者に、時計を作る資格があると思いますか？」

一見穏やかに笑顔を浮かべてはいるが、凄みのある声でそう告げら
れ、背筋がぞつとなつた３人はふるふると首を横に振る。

好々爺に見えるエマヌエル先生だが、時計学校校長に就任する前は、
何年も時計塔の番人をつとめ、ギルドの長をも務めたことのあるや
り手なのだ。

時には、まだ年若い大統領にも意見することがあるというこの大物
の迫力に、たかだか職人の卵のマナたちが適うはずもない。

しかも、街中の人たちから『歩く時計』とあだ名されるほど、エマ
ヌエル先生は時間に厳しい。

毎日、時間きつかりの生活を送るエマヌエル先生の行動を見て、自
分の家の時計の狂いに気づく人もいるという噂。

時間を守れない人間に特に厳しいのは言うまでもない。怒られてい
る当の本人たち以外のクラスメイトも、背筋を縮こめてうつむいて
いる。

「先生、ご、ごめんなさい。もう１秒たりとも遅刻はしません・・・
！」

マナは半ば拝むように、エマヌエル先生に頭を下げた。

（あー、もう絶対遅刻しない！やっぱり明日からは、目覚ましのベルを3個増やそう……だから許して下さい……！！）

心の中で、マナが祈っていると。

しばしの、沈黙の後。

「まあ……わかればよろしい。しかし君たちには、あとで特別に課題を出します。今日の授業が終わった後、校長室まで取りにきなさい。」

では、時間の浪費はこれくらいにして。授業を始める。」

黒板に向かったエマヌエル先生の姿を目に、マナたちはふーっと安堵の息を吐いた。

「……年、東の大陸で銀山が発見され、わが国にも大量の銀貨がもたらされることになる。それによる経済の混乱は……」

カツカツと黒板にチョークで細かく書かれていく経済史。

時計学校の授業で、なぜこんなことを学ぶのか。

経済だけではない。時計学校の授業は、実技以外にも、歴史、倫理、哲学、商学、外国語、美術・・・ありとあらゆる授業がびっしりだ。時計学校を卒業するまでの3年は、実技よりもこうした授業の方が重きを置かれている。

そうして3年間、机にかじりついて必死に勉強した後、それぞれが働きたいと思う工房を見つけ、2年間の見習い期間を過ごす。実技を磨く課程は、主にその見習い期間。

実際、職人にこんな知識が必要なのか、という疑問はあらゆるところで囁かれている。

このカリキュラムのほとんどは、現校長のエマヌエル先生が長い時間をかけて完成させてきたものだ。

本当なら多忙を極める校長の身ながら、毎年1年生には自身が教壇にたって授業を執り行う。

もともとは工房内の師弟関係によって受け継がれてきた時計作りの技術を、国立時計学校を卒業したものにしか職人への免状を与えられないとしたのも、ここ数十年のこと・・・つまり、エマヌエル先生や、彼の賛同者による働きかけによって決まったことだ。

時計作りは、この国にとって国家の命運を左右するほどの中心産業。少しでも、そのブランドに傷をつけるような工房を出してはいけな

そして、いずれは時計塔を守る番人を輩出しなければならない。

そのためには、技術だけではなく、精神的に揺らぎのない、深遠な知識を持つ職人を育てなければならない。

そのような考えのもと、体系付けられてきた教育方針であつたのだが。

だがしかし。

ともかく早く、機械をいじりたくて仕方ない……幼い生徒たちには、そんなことわかるはずもなく。

4 (前書き)

長いかも。

放課後、マナたちの寮の広間。

ざわざわと、課題をしたり読書をしたり夕食前の食前食をとっている（なにせ育ち盛りの男子ばかりだ）そのすぐ脇のテーブルで。

「だーかーらっ！アキレスが、亀のいたスタート地点に追いつく時には、亀はもつと先にいるんだってば！」

「はー？じゃあ、マナ、おまえ、亀の役しろよ。俺がアキレスだ。おら、外出ろ、実際走って実証してやんよ！おまえみたいなドン臭い生き物、一瞬で抜いてやる！」

「・・・いやいやーそういうことじゃないでしょ？これは、時間のパラドックスの議論なんだよ。哲学。て、つ、が、く。わかる、シリル？そんな実証結果提出したところで、また大目玉食らうだけだつて。」

エマヌエル先生から、特別課題を与えられた3人は、ない知恵を絞ってその難問に取り組んでいた。

「ああん？じゃあなにか？アキレスは亀に永遠に追いつけねえってのか！？おまえら、そんなナンセンスなこと信じてんのか？」

くわっ、とフランツに噛み付くシリル。

いやあ・・・、とフランツは曖昧な笑顔を浮かべ、マナはぐしゃぐしゃの走り書きだらけの自分のノートにふにやりと頭を乗せた。

走るのが速いアキレスと、のろのろ進む亀。

その二人・・・いや、一人と一匹が競争をする。

もちろん、ハンデはある。亀の少し後方から、スタートするアキレス。

よいいドンで同時にスタートしたとすると、後方のアキレスが、亀のスタート地点に到着した瞬間、亀は、アキレスの少し先にいることになる。この地点をBとする。

アキレスがB地点に着く瞬間、亀は、また少し先のC地点にいるはず。

アキレスが、C地点に着くとき、亀はまた少し先のD地点に、いるはず・・・そんなことを繰り返せば、アキレスは、永遠に亀に追いつくことができない、という議論だ。

そんなわけない。なんてバカらしい問題だ。

しかし、延々と何百年もの間、哲学者たちが議論してきたこの問題。

それについて思うところを書け。数学、哲学、どちらのアプローチでも可とする。

それが、エマヌエル先生から3人に与えられた特別課題だった。

考えれば考えるほど、真新しいノートのページみたいに、頭が真っ白になる。

(アキレス、亀、アキレス、亀、アキレス、亀……)

呪文のように、ぶつぶつと呟いてみると、だんだん腹がたってきた。

(もう、なんなの、あんたたち。競争なんてしなきゃよかったのよ。ハンデとか、なに紳士ぶってるのよ、亀なんか勝負挑んでる時点でおかしいでしょ!?)

あーあ、午後の実技の授業でやった、からくり時計作りは楽しかったなあ……)

現実逃避するかのように、マナがそんなことを考えていると。

「だいたいさあ、俺ら、時計作りたくて、ここの学校入ったんだぜ? 学者になりたいわけじゃねえっつの。」

なんでこんな問題ばつかやんなきゃいけないんだよ? 特別課題とか言ってるけど、ただ遅刻した俺たちに対する嫌がらせだろ!?

マナと同じく、思考がどん詰まりになったらしいシリルが口を尖らせる。

「うん……そのへんは、僕も同感だな。僕は、君たちみたいに、将来職人になるわけじゃないから、経済とか歴史とか、他の授業はまあやってもいいかなって思うけど、でも、こういう出口のない感じの学問って……ねえ?」

フランツも、同意を求めるようにマナの顔をのぞきこんだ。

「うー．．ん．．．。たしかに、この問題に、どんな意味があるのかわかんない。でもね、エマヌエル先生のすることに間違いはないと思う。父さまも、兄さまも、そう言ってたし。」

マナは、うなりながらもそう答えた。

問題はちんぷんかんぷんだけど、エマヌエル先生の言うことに従っていれば、立派な時計職人になれる。先生の言うことに間違いはない。

マナと同じようにかつてはこの学校で学び、エマヌエル先生の教える子でもある父と兄がそう言ってた。

それから、エマヌエル先生がよく、答えのない問題を生徒にさせたがるのは、生徒たちが大人になった時にぶつかる問題に、必ずしも答えがあるわけではないからなのだと。

だから、無条件に、マナもそう思う。意味不明な課題には腹が立つたとしても。

「ヨシユアさんが？」

ヨシユアの名前に弱いシリルがぴくりと反応する。

「ヨシユアさんと、ハンスさんが言うなら、そうなのかもしれないね．．．．とはいえ、僕らにこの問題が解けないという現実は変わらない。」

フランチはそう言うと、テーブルの上に広げた彼のノートをおもむろにぱたんと閉じる。

それから、お坊ちゃんらしい優雅な仕草で、カップに入っていた冷えた紅茶をすすると、

「じゃ、このへんにして、僕は少し家に帰ってくるよ。夕飯までには戻るからね。」

胡散臭い笑顔でにこりと微笑んだ。

飲み干した紅茶のカップを片付け、手荷物をまとめてそそくさと出て行こうとするフ란ツ。

(・・・家に?)

たとえ自分の実家だったとしても外泊は基本的には禁止のこの寮。

休日でもないのに、こんな時間から家に帰るなんてどういうことだろう。

疑問に思ったマナはフ란ツに尋ねる。

「ねえ・・・おうちに何かあったの?」

「ん?んー・・・まあそういうことかな。寂しがらなくても、僕は君のもとにすぐに帰ってくるよ。大丈夫。」

ほわほわのマナのくせつ毛を、よしよしと整えるように撫でて、フ란ツはぱちりとウインクする。

・・・いや、まったく寂しくないし。胡散臭いから聞いてみただけだ。

「ついかな……フ란ツ、おまえ、その問題、自分ちのお抱え職人にやらせる気だろ……？」

胡乱な目でじろりとフ란ツを睨んで、今度はシリルが問う。

「あ、バレた？でも、いいんだよー、僕は。」

「何がいいんだよ、金にモノ言わせてずりいだろ！」

「フ란ツ、カンニングは駄目だよ！」

「カンニング……はは、厳しいね、マナちゃん。でも僕は商人の息子だからね。エマヌエル先生が、アプローチは自由って言うってたよね？」

なら、僕は商人らしく、持てるものを使って要領よく。そういうこと。」

フ란ツは悪びれずにそう言つと、ひらひらと手を振りながら、じやあね、と席を立った。

なんという金持ち特権。

残された二人にだって、もちろん問題を解く術があるわけではない。そんな早道があるならぜひとも使いたい……。しかし、二人は庶民。

マナとシリルは、二人して、ふう、とため息を一つついた後。

「……やっぱ俺も、家帰ってくるわ。」

シリルがぼつりとつぶやく。

「家？シリルも、誰かに課題やつてもらうの？」

「んなわけねえだろ！うちの父ちゃんも母ちゃんも、兄貴たちも、こんな問題わかるわけねえって。」

シリルはそう言っ**て**ぶんぶんと首を振る。

たしかに、下町の陽気なパン屋一家には哲学なんて不似合いだ。

マナはかつてシリルに連れられて行った、彼の実家のお店を思い出**す**。

店先には、よく手入れされたハーブや色とりどりのゼラニウムの鉢が並んでいた。

シリルの父と二人の兄が焼く、ふわふわのおいしそうなパンたち。

よく太り、よく笑い、よく怒るシリルの母親を見て、シリルは本当に幸せに育ったのだろうと思った。

「じゃあ、どうして家に？」

「いや、頭使ったら、腹減った。」

マナの問いに、あっさりそう答えたシリル。

「店寄って、なんか持ってくる。このままじゃ晩飯までもたない。・ ・ ・ ついでに、おまえの好きな、カスタードクリームパンも持ってきてやるよ。」

ぼそぼそと、付け足すようにそう言う。

シリルのうちの、カスタードクリームパンは、さっくりした生地の中に、とろりとしたカスタードクリームがいっぱい詰まった人気商品で、マナの好物だ。

なんだかんだで優しいシリルは、いつも実家に帰るたびに『ついで』と言いはって、マナにそれを持って帰ってきてくれる。

マナはバニラビーンズの甘い香りを思い出して、ごくんと喉を鳴らす。

パンは、食べたい。すごく食べたい。でも。

「で、でも課題はどうするの?」

「いいよ、フランクが、商人の息子らしく卑怯な手を使つなら、俺はパン屋の息子らしく」

息子らしく・・・?

「白紙で出して、堂々と怒られる!」

こぶしをぐっと握り、それこそ堂々と言いつ放ったシリル。

「俺は、おまえみたいに番人目指してるわけでもない。フランスみたいにな、繼ぐ工房があるわけじゃない。

ただ、町の人々に、安くて質のいい時計を作ってやりたいだけだから。それ以上は望まない。

時計塔の鐘は1時間に一回だろ？ちょっと不便なんだよな・・・パンを作るのにだって、細かい時間を計れると便利だし。

そういう職人になるには、誠実さと確かな腕さえあればいいんだよ。頭のよさはいらねえんだ。」

どこかすつきりした面持ちでシリルが言う。

「確かに、そうかもしれないけど・・・でも・・・あ、あの、ちよ、ちよっと！」

マナが呼び止めるのも聞かず、シリルは、じゃあとで、と行ってしまふ。

テーブルに、一人残されたマナ。

（あたしは、どうしよう。）

この問題はわからない。かといって、フランスのように誰かに頼むことも、シリルのようにあっさり諦めることもできない。

（・・・父さまなら。兄さまなら。どうする？）

頭を抱え、マナはしばらく考えこむ。諦められない。諦めたくない。どちらかといえば父や兄のように才能があるわけではないマナは、ここまで憧れと根性だけでやってきた。

努力。根性。自分に、今あるとしたら、それだけ。

ないとしても、今この瞬間に作れるのは、それだけ。

（よし！もう少し、やってみよう。）

マナは、自分のノートを閉じると、カバンにつめ、フランスやシリアルと同じく寮の出口に向かった。

彼らのように、自分の家に帰るわけではない。

そもそも帰ったって、誰もいない。父も、兄も。それから……
・母も。

マナは、少しでもヒントを得るため、国立図書館に向かう。

夕暮れが近づく、石畳の道を通って。

時計学校の敷地から、国立図書館まではそう遠い距離ではない。

細い路地を抜け、市民の用水路として使われている小さな川、その上にかかる橋をひとつ越えると中央通りにさしかかる。

それをまっすぐ進んで行くと、街の中心に位置する教会、そしてその前に広がる中央広場に出る。

広場を囲むように立ち並ぶ商店やカフェ。

フランスの実家のヘンレイン商会も、この中央広場に面した一等地に本店を構えている。

工房や、かなりの豪邸であるフランスの生家は、もう少し離れた山の手の閑静な土地にある。

時計塔のある丘のほうだ。

ちなみに、シリルのパン屋は、時計学校を挟んで反対側、西の旧市街のエリアに位置し、そのへんはおもに下町として多くの人々が暮らしている。

マナが家族と過ごした家も、旧市街の方にある。

まだ日が暮れるまでには時間があり、中央広場は多くの人で賑わっていた。

夕飯の支度だろうか、石造りの家々からはおいしそうなおいが漂っている。

それらの喧騒を東に抜けると、今度は大統領府、庁舎、議事堂など、国の中枢機関が並ぶエリアに入る。

厳重に柵で囲まれ、警備の兵士が見回るここのエリアの中で、国立図書館は、唯一一般市民が気軽に立ち入れる場所なのだ。

もちろん、使用許可は取らなければならない。

しかし、時計学校の生徒たちは学生証を見せるだけで図書館に入ることができる。

「こんにちはー。」

受付で、ついと学生証を出す。

「ああ、こんにちは、マナちゃん。勉強かい？」

「はい。また課題もらっちゃって。」

マナはそう言うと、受付のおじさんにえへへと笑った。

困ったことがあれば、いつもここにきて調べものをしているので、いつのまにかこの受付のおじさんとは顔なじみになってしまったのだ。

「そうかい。でも、気をつけてくれよ、今日はいつもより閉館時間が1時間早いんだ。」

官邸の方から、急にそう言って来てなあ。絶対、今日の6時以後は人を入れるなつて。」

相変わらず人のよさそうな笑顔で、おじさんが言う。

へー。官邸から。

国立図書館では議員さんたちが勉強会をする時なんかもあるから、そついうことかな。

「わかりました、6時ですね。」

マナはたいして気にせず、おじさんに肯く。

頑張れよー、と声をかけてくれるおじさんにぺこりと頭を下げ閲覧室へと向かった。

もとは赤い色だったのであろうが、長い月日の経過ですっかり色あせてほとんどオレンジ色になってしまった絨毯が敷かれた長い廊下を突っ切り、階段を昇る。

時計塔や時計に関する資料が並ぶ書架は3階にある。

マナは慣れた足取りでそこに辿り着くと、ギィ、と軋む音を立てて扉を開いた。

それから、手近にあった窓際の机に荷物を置き、まるで森のようにたくさんの書架が並ぶ中へと歩を進めて行った。

「えーっと・・・時間のパラドクス・・・時間論・・・」

古い本独特の匂いが充満する通路で、マナは指でなぞるようにして本の背表紙を確かめる。

哲学関連の本は、ここの並びにあるはずなんだけど・・・

図書館に来るのが好きで、だいたいどこに何があるかを承知しているマナだったが、いかんせん、時計を中心にして成り立ってきたこの国。

時間、時計関連の資料は、腐るほどある。

まあ実際、古すぎて半分腐っている古文書なんかも、奥のほうに管理はされているのだが。

それは、授業など特別な許可がないかぎり、時計学校の生徒でも目にすることはない。

貴重なものなのだ。

そうして、膨大な本の中からお目当ての本を見つけようとしている間。

どのくらい時間が経ったのか。

窓の外の日はずいぶん傾き、閲覧室の中も薄暗い闇が広がり始めていた。

そんな中、ぼそぼそと棚を挟んで向かいの通路から人の話し声が聞こえ、マナはハツとした。

マナが3階閲覧室に入ったときには、ほとんど人がいなかったはず。

「……ユーリ様、ユーリ様自らこのようなことをお調べになってどうなさるおつもりですか？」

今、軍の者が、正面扉をなんとかして開けようと、丘のほうへ重機を運んでおりますし……もう少し、報告を待たれては？」

「待つ？馬鹿を言うな。ことは一刻を争うんだぞ。イアン、おまえだってわかってるだろ？」

緊急連絡用の鳩が、塔の下、ナイフが刺さった死体の状態で見つかったんだ。

通信文は、血にまみれて読むことが不可能だったと聞く。上で、何かあったに決まっている。」

本を選ぶのに夢中だったマナの足が、ぴたりと止まる。

いや、もともと数刻前からマナは石像のように微動だにせず、立っ
たまま手に持った本に目を通していただけれど。

マナは何かに夢中になると、寝食どころか呼吸も忘れるほど没頭し
てしまう癖があった。

今朝、時計塔を眺めながらぼんやり考え事をして遅刻したのも、も
とはといえば、こういうマナの性格が災いして……と、今はそ
んな悠長なこと考えている場合ではない。

マナは書架の向こうから漏れ聞こえてくる声に、耳をすませた。

後から喋った方はまだ若いようで、やや高い少年の声。

もうひとり……敬語を使っているほうが、年上なのだろう。

語尾が少し鼻にかかるような発音に聞こえたので、もしかしたら南
の大陸生まれなのかもしれない。

こちらも、まだそれほど年齢を重ねていないであろう若い男の声だ
った。

二人が何者なのか、見当もつかない。

それに、立ち聞きなんてしちゃいけない。

マナにもそんなことくらいわかっていたけれど、しかし、マナの耳に聞こえてきた内容はとても無視できるようなものではなかった。

軍。塔。緊急連絡用の鳩の死体。

これらは、もしかしくなくても、マナの父、ハンスがいる、あの時計塔に関する話ではないか。

そのうえ、あまりいい話ではなさそう。

マナは、緊張で震える体を必死に抑え、見つからないように息を殺す。

「ユーリ様、まさかとは思いますが、時計塔に出向かれるおつもりですか？」

「……だつたらなんだ。」

「私は、賛成いたしかねます。もし、塔の上層部で何かが起こっているのだとすれば……あれは、素人の我々に手に負えるものではない。ユーリ様だって、それくらいはおわかりでしょう？」

使用人らしく口調は丁寧だが、年長の男は呆れたように少年に告げる。

そして二人の会話から、『時計塔』というダイレクトな単語を耳にしたマナはごくんと息を飲んだ。

やっぱり、時計塔に、何かあったんだ……！

「じゃあ、俺は何もせず、ここで役立たずの軍からの報告を夕食でも食べながら待っているというのか？あれが止まっていられるのは、24時間、たった一日だけなんだぞ。その後のことは、どれだけ調べてもどんな文献にも情報がない。父上が外遊中でいない今、万が一事が大きくなれば、それが今後にどういう影響をもたらすと思う！？」

棚の向こうで、マナからはまったく見えないが、イライラと足を踏み鳴らし声を荒げる少年。

ただ事ではなさそうな様子だけは、十分伝わってくる。

「・・・お静かに。今、ユーリ様に一番必要なのは、冷静になられることですよ。まだ、止まっていると決まったわけじゃない。何かのトラブルで——」

「何がトラブルだ。おまえも、今、素人の手には負えないと言っていたばかりだろう。扉は開かない。鳩も死んだ。番人たちが誰も降りてこない。おそらく、なんらかの人物が時計塔に忍び込み、番人たちを殺し、あの時計の機密を悪用しようとしている・・・そういうシナリオが一番しっくりくるんじゃないのか！？」

少年の声が、閲覧室に響き渡った瞬間。

マナは、ごとん、と手に持っていた本を床に落とした。

微かな振動、音とともに、バサリと情けない状態で床に開いた本。

しまった………！

「イアン！」

少年の短い叫び、その『ン』の響きがマナの耳に伝わるかどうかという素早さで宙を黒い影が舞った。

「……動かないでください、お嬢さん。」

低い声が耳元で囁いた次の瞬間、マナの首筋にひやりと冷たい金属の感触が。

「……っ！」

マナは、その間、一步も動けないまま、ただ息を呑んだ。

ナイフだ。

実際にマナの首には触れているわけではないが、わずか1ミリでも動けば喉をかききられる。そのことだけは本能的にわかった。

「何者だ！？」

ひとつ向こうの通路から、少年が駆けてくる。

身動きのとれないマナは背後の人物を確認することはできないが、少年の顔はハッキリと見えた。

夕暮れの弱く赤い陽光が差す中、橙に染まった透けるような金色の髪。湖みたいな深い青の瞳、白い肌。

思慮深そうなその美貌は、少年の育ちのよさを表しているようだった。

身を包む白地に金糸の重厚な刺繍が施された軍服は、貴族の子弟が議会等に登壇する際に着用されるもの。

「子供、おまえ、なぜここに忍び込んでいた！？何をしていた？」

マナの漆黒の男への恐怖を打ち消すかのように、少年がぎゃんぎゃんとたずねる。

うるさい。

どっちが子供っぽいんだか！

マナは男に支えられたまま、ムツと少年を睨んだ。

かなりの美少年だが、どうやら思慮深そうなのはその容貌と服装だけで、中身はとんだお子様みたいだ。

「ユーリ様、女性に対する礼儀はお教えしたはずでしょう？」

「今そんな場合か！」

「いかなる事態でも紳士は紳士でなくてははいけません。ねえ？」

少年をいなすようにそう言って、マナに微笑んだ男。そのまま掴んでいたマナの腕を放し、ゆっくりと一人で立たせた。

「その制服、どうやら時計学校の生徒さんのようですね。1年生・
・ああ、もしかしてハンス主任のお嬢さんですか？」

「ハンス主任の？」

マナの父の名前が出て、いぶかしそうにマナを見る少年。

そして一方のマナは、父の名前から二人の会話を思い出しハツとした。

「父をご存知なんですか！？・・・あ、そう！さっき、あなたたち時計塔が、って話を——！」

番人が、殺された・・・・・・・・とか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0867w/>

時計塔の恋する悪魔

2011年10月6日20時49分発行